
恋の季節は突然に

華陽

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

恋の季節は突然に

【Nコード】

N1445P

【作者名】

華陽

【あらすじ】

母子家庭に育った赤城絆あかぎすなはあることが理由で、他人と本当の信頼関係を結ぶことができなくなっていた。

高校一年の春、母の経営する芸能プロダクションで絆は高坂稜哉「しゅかりょうや」と運命的な出会いをする。

稜哉の一途なまっすぐな心に触れることで、絆の心も次第に変化が生じ、それがいつしか恋の方向へ…。

しかし、そこにはいくつもの障壁があつて…。

プロローグ（前書き）

お久し振りの方もそうでない方もこんにちは。

BL3 作目に入りました華陽です。

さすがにそろそろ文章もうまくなったか、というと、残念ながら、初期のころと対して変わらない構文能力のままなのです（本当に申し訳ありません）。

今回は、学園から少し離れた物を取り扱いたいと思います（とはいえ、やはり学園好きなので、少しは入ってしまうかもしれませんが平にご容赦を）。

さあ、それでは前置きも長くなってしまいました、皆さま、どうぞ今回もよろしく願います。

プロローグ

休日の朝方。

もちろん一般家庭なら、少しゆったりとした日常が過ぎていき、人々はまだまだその休日という余韻に浸りながら夢心地の中で過ごすのが普通のはずだが、本日の赤城家ではそうはいかないのだった。まだ布団ですやすやと寝息を立てている赤城絆にその魔の手は静かに忍び寄っていた。

「こらー、毎週毎週同じことを何度も言わせるなって言ってるだろうがー。」

「うわー。」

ドカッ。

そう音を立てて、絆は床にしたたかに体を打ち付けられた。

「ってー。毎週毎週なんでこんな起こし方なんだよ。少しは元女優として自重しろよな。」

そう、先ほど絆の寝ている敷布団をすさまじい勢いで跳ね上げたのは、絆の母の赤城遥あかぎようだった。

絆の言うとおり、遥は絆が生まれるまでは大手の芸能プロダクションにて、その美貌と華麗な演技力で女優街道まっしぐら、加えてその天真爛漫なキャラを利用した人望の厚い、いわゆる世の中のかなーり一部分に入るような人物だった。

しかし、絆が生まれる少し前に、電撃出産引退。その後は、自ら芸能関係の会社を設立、芸能生活で培ってきた様々なコネと持ち前の天真爛漫さをフルに使って会社を運営、その後会社の運営は上向きになったが、苦しかった設立当初の気持ちを忘れずにいつも質素儉約に励むスーパードールな（絆にしてみればちよっとうるさく怖い）母親となったのだ。

（昔の写真とか見ると、こんなじゃなかったのになー……。）
そう、芸能人として活躍していた当時はその持ち前の明るさにプラ

入して時折見せる嫺やかな仕草や可憐さも相まった癒し系としてのその甘い顔立ちも手伝って人気を博していたのだが、現在は当時の面影はあまりなく、むしろ快活さは前のそれをはるかに凌駕するような勢いを見せ始めこれを利用して、また芸能人に転身できるんじゃないか（ただ、ジャンルは明らかに異なっていくだろうが）と絆は密かに思っていた。

「なんだ？親に向かってその態度は？」

「あ、うそうそ、それより今日は一体どうしたんだよ？」

そう、通常はこのように絆を豪快に起こした後は、朝の多忙さに押されて絆がしっかりと覚醒したかどうかは確認せずにそのまま仕事場へと向かうのが遥の日課なのだ。

「ああ、そうだった。今日は午後に必要な書類が届くんだけどな、相手方、どうも自宅に配送しちまったみたいなんだ。それで、いちいちここまで取りに来るのもめんどくさいから、あとでお前が届けにくんねえかなって頼みに来たところなんだ。」

笑顔で言う遥のその表情の中には、わざわざ朝の忙しさを縫って頼んでやっているんだという有無を言わせない強制力を渦巻かせていた。

「わかったわかった。それより時間の方大丈夫なのかよ？」

「おっと、そうだった。それじゃあ、頼んだからな。」

忘れたらどうなるかわかってるな、という脅しを込めた笑みを残して遥は意気揚々と仕事へと向かっていった。

「ったく、息子をパシリに使うなよな。」

とは言いつつも、実際には遥には相当感謝している絆だった。

物心ついたところから母子家庭に育った絆だったが、基本的に寂しい思いをした記憶はあまりなかった。

学校の行事には絆が嫌がろうと、全部参加していたし、家でも小さいころは遅く帰ってきた記憶はなかったし、料理も基本は遥の手料理を毎日食べていた記憶が絆自身鮮明に覚えている。

それだけに、どうしても父親の存在が気になってしまうのは子供と

してまあ当然のことだった。

遙はほとんど父親に関しては語らなかった。

まさしく『ほとんど』という形容がしつくりとくるほど、良かった思い出も、悪かった思い出も一切合切話を聞いたことはないのである。

ついでながら、絆が父親関係の話を持ち出そうとするものならば、いつもはあれだけ明るい遙が、少し目線をそらして明らかに拒絶するような素振りを見せるのだった。

ここまで徹底的かつ決然と父親に関しての情報をシャットアウトされているとなると、絆としては、どうしても父親のある可能性を疑わざるを得なかった。

それは、まさしく不倫によるショックからの隠匿である。

絆がまだ小さいころのことだが、遙が嗚咽を押し殺して一人で泣いている姿を見たことがある。

その当時はまだ小さかったということもあり、遙が泣いているという状況がうまく理解できなかったのだが、現在から類推すると、明らかにそれは仕事や絆のことで泣いているような風ではなかったように思え（というより、遙が仕事で悩んでいるのを見たことはほとんどないし、絆に関して泣くようなことは、死なない限り皆無なんじゃないかと思う絆であった）結果として、その理由が父親なんだと決定したのだった。

（まったく、遥みたいにかれいで優しい（まあ確かにそこそこ凶暴ではあるけれど）人を平気で捨てられるかふつつ…？）

そう、絆が生まれてから、父親はまったく連絡さえ入れてはくれなかった。

そして、その小さいころの遙の泣いている姿の記憶のために、絆はどうしても他人に対して信頼をかけたとき、裏切られたときの悲しみを考えると、本当に信頼し合える相手を男女ともに見つけることができてない対人関係に関しては少々臆病な性質になってしまった。

しかし基本的に遥の息子であるため、天真爛漫さから多くの人間が絆との間に交際を求めてくる。

ただし、本当の意味で信頼をかけることができる親友という人物にはまだ会えていなく、ましてや恋人なんて言葉にはまったく無縁な生活を送っている絆だった。

そしてこの日、この時の遥の半強制的な仕事を与えられることによつて絆は運命とも呼べる出会いをこの後にすることになるのだが、この時の絆にそれを知るす術はどこにもなかった。

プロローグ（後書き）

プロローグだけに完全に家での一コマになってしまいました。

恋愛に辿り着くのはかなり先のことになってしまいそうですが、どうか少しの間お待ちください。

何か、不審な点などございましたら、どんどん感想の方によろしくお願いします。（誤字脱字なども、発見次第どうぞお気軽にお教えください）

第一話 出会いはいつも突然に

結局、昼過ぎにようやく書類は届き、それを持って絆は遥のいる仕事場へと向かった。

遥の会社は場所的には最適な都心のだ真ん中にあり、そのため郊外に居を構えてる赤城家からは大分遠かった。

ようやく会社に到着した時はすでに時計は午後4時を指そうとしていた。

「やつばいなー。遥、怒ってるだろうなー。」

実は絆はこれまで、ほとんど遥の仕事場に顔を出したことが無かったのだ。

それはつまり、なんとなく母親の仕事場での顔を見たくないというか、単純に気恥ずかしいからなのだが。

しかし、そんな感情のせいで、道を間違えて遅れてしまった原因を作ってしまった自分を嘆いても時すでに遅し。

絆はかなり焦って会社の中へと走って入ろうとしたが、突然横から伸びてきた手に絆は腕を取られてしまった。

「ねーねー、君、かわいいね〜。うちになんか用？もしかしてアイドル面接受けに来たとか？」

その方向を見てみると、今風のチャラチャラした男がニヤーっと笑いながらこつちを見ていた。

「は？アイドル面接？」

「あれー、そういうわけじゃないんだ。それだったらさ、ちょっと俺に付き合ってくんない。仕事終わって暇だからさー。」

こいつは、こつちが焦って入ってきたのにまったく気づいてないのか、それとも単に強引なだけなのか、絆の腕を強く引っ張った。

「…ちよ、痛つ。」

次の瞬間、突然腕にかかっていた力が抜け、思わず絆がよろめいてしまった。

そのまま倒れることを覚悟した絆だったが、不思議と体は地面にたたきつけられない。

そして、後ろを振り返ると、先ほどの男とは比べ物にならないくらい的美形でかつ長身の青年が絆を優しく支えてくれていた。

「おい、柊也。嫌がつているだろう。」

「どうやら、この長身の青年が絆を解放してくれたみたいだった。」

「ucci、稜哉か、別に人の勝手だろ。それに嫌がつてるかどうかなんてわからないだろ。」

そういうと、稜哉と呼ばれた青年はこちらを向いて心配そうな眼差しを向けた。

「嫌じゃなかったのか？」

その顔に少し見とれて惚けてしまった後、我を取り戻した絆は勢いよく首を横に振った。

「だそうだ。柊也、お前の安易な行動のせいでオーナーに迷惑がかかるようなことになってみる、俺が許さんからな。」

そう一喝すると、柊也と呼ばれた男は舌打ちをしてその場から立ち去って行った。

「すまなかったな、うちのやつが迷惑かけて、俺は高坂稜哉。」

「あ、もしかして、高坂左京？」

そう、絆のようにあまり芸能関係に疎い人物でも名前を聞けばすぐに思い浮かぶ最近赤丸上昇中の売れっ子俳優、それが高坂左京だった。

「ああ、それは俺の芸名だよ。本名は稜哉だよ。君は？」

「あ、俺は赤城絆。ちよつと社長室に用があるんだけど。」

「ああ、そうか。分かった。それなら俺が案内してやるよ。」

「え、そんないいよ。仕事の邪魔になっちゃいけないし。」

単純にもしも会社の不利益に繋がるようなことをした時を考えたら、もう安全に家で寝ていることもできなくなると絆は本心では思っていた。

「遠慮するな、さっきみたいなやつにまたからまれたら面倒だろ？」

「まあ、それは確かに。」

「よし、それじゃあ行くか。」

そういうと、稜哉は先導して歩き始め、絆もこれ以上断るのも稜哉の時間をさらに削ってしまうだけだしなと悟り後に従った。

社長室前に着くと、稜哉はノックをしてから、「失礼します。」と言ってドアを開けた。

「オーナー、お客様をお連れしました。」

「ん？ああ、稜哉か。あ？客？」

そういつて、仕事の書類に目を通していた遥はこちらを見て、吹き出した。

「オーナー？」

「稜哉、そいつが客だつて？お前、俺の名字考えてみろよ。」

「へ？」

稜哉は少し呆けた後、絆と遥を見比べてから、かなり驚いた表情をした。

「いや、すみません。茶封筒を大事そうに持っていたので、アイドル志望かと。」

そうしたら、遥は盛大に笑い始めた。

「そいつが、アイドルだつて？稜哉笑わせんなよ。」

なんとなく絆はムツとしたが、こんなに楽しそうに遥が笑っているのに、何か言っていきなり怒られてもそんなので黙ってその状況を眺めていた。

「ああ、それより、絆。書類の方持ってきてくれたか？」

「あ、そうだった。これだろ。」

「ああ、これだこれだ。ありがとな。」

そういうと、遥は茶封筒から書類を取り出し始めながら、

「そうだ、せっかく来たんだから見学してけよ。まあそんなに広くはないけど、つまんなくはないと思うぜ。」

「うーん、まあ面白そうだし見て行こうかな。」

「おつし、それじゃあ、そうだ稜哉、お前これから8時まで仕事ないだろ？せっかくだから案内してやってくれないか？」

「え、そんな。稜哉さんに悪いよ。」

実際、せっかくの休憩中の稜哉をわざわざ煩わせるのも、絆としては申し訳ない気がする。

しかし、稜哉は淡々とした表情で答えていた。

「大丈夫だよ、オーナー、お任せください。」

「おう、任したぞ。絆、くれぐれもスタッフの邪魔になることだけはするんじゃないぞ。」

そういうと、遥はふたたび書類に目を通し始めた。

「それじゃあ行こうか？」

「あ、うん。」

そういつて、二人で社長室から出た。

「あの、稜哉さん。ご迷惑なら別にいいですよ。俺、一人で見て回れますし。」

「ん？大丈夫だよ。それとも俺と一緒に嫌？」

「い、いや、そんなことはないですけど。」

「よし、それじゃあOK。それと、呼ぶときは稜哉でいいよ。なんだかさん付けって他人行儀でやだし。」

「え、あ、でも。」

「はいはい、それじゃあ慣れるために呼んでみよっか。」

「う、ええ？」

そして稜哉は絆が呼ぶのを待ち始めた。

多分このままじゃちが明かないことを悟って、絆は、「…稜哉。」と言った。

「はい、合格。それじゃあ行こうか。」

そういつて、二人で歩き始めた。

なんだか不思議な感じの人だな、と思ったことは絆の中だけのことである。

第一話 出会いはいつも突然に（後書き）

第一話投稿終了です。

第二話 稜哉と一緒

結局その後、稜哉の案内で絆は社内を一通り見て回って行った。

最初こそ稜哉への迷惑を考えて少し静かにしていた絆だったが、元来元気な体質のため、ロビーに戻ってきたときにはかなり嬉々とした表情になっていた。

「すごいね、ここってこんなに大きいところだったんだ。」

「ああ、こちら辺で一番大きいところだからな。それよりこれだけ歩き回ったんだ、のどでも乾いているんじゃないか？そこらへんでなんか買ってこようか？」

「え、いいよ、大丈夫だから。」

正直、これ以上稜哉に迷惑をかけるのも気が引ける話なので、絆は断ったが稜哉は笑って、

「いや、遠慮しなくていい。」

そういつて絆の頭にポフツと手を乗せた。

その瞬間、絆の脳裏になんだか懐かしいような感覚が過った。

（なんだろう、この感覚……。前にもどこかで……）

そう考えているうちに、稜哉は自動販売機へと向かってしまった。

「絆、何がいい？」

「あ、うん、えーと……。」

そのまま、先ほどのことは忘れて絆も自動販売機の方へ向かった。

「それじゃあ、カフェオレがいいかな。」

そう言った時、一瞬稜哉は驚いたような表情をしたが、すぐに元の表情に戻って、

「カフェオレって、子供用に置いてあるようなもんだぞ。」

と言って、また絆の頭をポンポンと叩いた。

「う、うるさいなー。仕方ないだろ好きなんだから。」

「はいはい、分かった分かった。」

そうして、稜哉はコーヒーを買い、ロビーの椅子で少し休むことに

した。

「絆は寂しくないのか？」

お互い座って飲み物を飲みながら少し会話が途切れていた所に唐突に稜哉は聞いてきた。

「へ？」

「あ、いや。母親がいつも忙しいって、やっぱり寂しいんじゃないかって。」

「ああ、そういうことか。でも、遥って昔っからあんな感じだし…。」

「そういえば、絆はオーナーのことを、名前で呼んでるよね。」

「ああ、それは、小さいころから行事のときとか普通は父さんがやるようなことも一緒に全部やってくれてたからさ、なんだか母さんって呼ぶのはおかしい感じがしてさ。」

「それでも、やっぱり父親なしでの生活は寂しかったろ。」

「うん、まあ確かにそういう時もあったけど…、あれ？なんで稜哉が俺の父親がいなくて知ってるんだ？」

「あ、ああ、それはオーナーから聞いてさ。やっぱり絆も寂しい思いをしてるんじゃないかって前にばやいてたからさ。」

残念ながら絆の頭ではセンチに悩む遥の姿を想像することはできなかったが、それでも自分のことを心配してくれているということに對しては、素直にうれしかった。

「別に、大丈夫だぜ。ほら、物心ついた時からもう遥だけだったしさ。それに毎日いつもどやされてて、むしろさびしがつてる暇なんてなかったし…。」

「絆は強いんだな…。」

稜哉はさっきまでの楽しそうな表情とは違い、まるで絆を愛おしむようにじっと見つめた。

「稜……哉？」

「おーい、絆、稜哉。」

その時、大声で二人を呼ぶ声がロビーに響き渡った。

「あれ、そのかつこどうしたの？」

声の方向を見ると、正装した遥がいた。

「ああ、これから急遽出張の用事が入っちまってな。明日の夜には帰ってこれるんだが……。」

そう言った後、遥は絆をじーっと見て、

「ぶっちゃけ、生活能力ゼロのお前をあの家で一人で置いとくのは心配だな。」

「は？何言ってるんだよ。大丈夫だって。」

「ほー、前にたった一日俺がいなかっただけで餓死寸前だったお前にそんなことが言えるのかー？」

「な、それは……。」

そう、以前にも同じように遥は仕事の関係上、一日だけ家を留守にすることがあったのだが、遥の言うとおり絆は見事に部屋でぐったりしている姿を遥にさらしてしまう結果となっていた。

言葉に詰まってしまった絆を見て遥は稜哉の方を見て、

「悪い、稜哉。来月の給料少し上げとくから、こいつの面倒一日だけ見てやってくれないか？」

「は、何言ってるんだよ。」

（とゆうか、こんだけ迷惑かけといてこれ以上なんて、正直失礼だろー。）

しかし、稜哉は淡々とした口調で言った。

「別に、いいですよ。俺の所は一人暮らしなんで、仕事が終わるまで待っててもらえるなら。」

「おっし、悪いな稜哉。それじゃあ絆、稜哉に迷惑かけんじゃねーぞ。」

そういつて絆が反抗する間もなく、あっという間に会社から出て行ってしまった。

「ほんつとにごめん。いっつも遥はあの調子でさ。」

「別にいいって。それに俺も絆と一緒にいられるのはうれしいし。」

「え？」

その時、絆の心臓は大きな高鳴りをあげた。

（なんだよ今の？）

その理由もわからず、絆を下を向いていることしかできなかった。

そんな絆の頭にまたポフツと手を乗せながら、

「今日はよろしくな。」

そう稜哉は声をかけたのだった。

第三話 眞実はいつも

結局稜哉の仕事が終わって10時から稜哉の家へ絆と稜哉は向かった。

稜哉の家は、仕事場からそんなに遠くない高級マンションの一室だった。

「ふわ〜、やっぱり売れっ子は違うんだな〜。」

「そうでもないけどな。」

（やっぱりこういう謙虚なところが人気の秘訣なのかな〜。）

などと思ったが、やはりそれに加えて身長とルックスだろうと思い、絆は自分のそれと比べて愕然とした。

顔は母親似だからまあいいとして、やはり身長に難がある。

（いやでもまだ高校1年だし、伸びる可能性はまだまだあるよな。）

そして明日から毎日牛乳を飲むことを決意した絆だった。

「さあ、どうぞ上がって。」

「うわー、すごい景色。」

リビングに入るとまず目に入っただのは窓から見える絶景の夜景だった。

「夜景をきれいに見える場所がよくってここを選んだんだ。絆も気に入ってくれたか？」

「うん、すごいきれいだねー。」

一人すごく盛り上がっていたら、

「絆はここで見てていいよ。俺は夕飯の準備してくるから。」

「あ、俺も手伝うよ。」

「大丈夫だよ。こう見えても一人暮らしに慣れてるから簡単なものくらいさつと作れるし。絆は今日はちゃんといい子にして俺を待っててくれたからな。」

「な、子供扱いすんなよな。」

「まあ、咄嗟に『カフェオレ』を頼むぐらいだからな。」

「稜哉！」

そうして稜哉は笑いながらキッチンの方に向かった。

その稜哉を追いかけようとしたとき、ふとテレビの脇に置いてあった写真立ての方に目が向いた。

「うわー、これって稜哉の小さいころかー。」

そう、そこには幼いころの稜哉とその両親が写っていた。

「やっぱり今とは違っても綺麗系なのはアイドルの潜在能力ってやつなのかな？」

しかし、その後少し違和感があったのでその写真をよく見てみると、ほとんどの写真で稜哉だけはまったく笑っていないことに気づいた。どことなく寂しそうな、悲しそうな写真。

そこまで見たとき、絆にはある疑問が浮かんた。

「どうだ絆？即席の割にはうまかっただろ。」

「うん、すっげーうまかった。それにしても、本当にごめんな。いきなりお邪魔しちゃって。」

「いいって言うてるだろ。一人で食べるより二人で食べた方が楽しいしな。」

二人は夕食を終えた後居間でソファに座ってくつろぎながら話していた。

稜哉の作ってくれた食事はちゃんと栄養を考えられたメニューになっていた。

ご飯に野菜炒め、味噌汁にブリの照り焼きなんて、なんとなく稜哉に似合っていないような気がして最初は心の中で絆も笑っていたが、食べてみて本当にびっくりした。

その味は即席とは思えないほどしっかりとっていて気づいた時には絆の皿の上は空になっていた。

その料理のおいしさに食欲が満たされたところで、絆は先ほどの疑問を思い出した。

「あ、あのさ稜哉。」

「うん、どうかしたか？」

「稜哉って両親と一緒に住まないのか？」

そう、先ほどの写真は、いずれも絆の家からさほど遠くないような場所で撮られたもののようなからだ。

たとえば、写っていた公園は絆の家からもそう遠くはないところだし、大体の場所は地元の人々が休日親子そろって遊びに行くような場所ばかりだった。

わざわざ別々に暮らしているのかそれとも単なる絆の思い違いか。それでも、やっぱり写真の中の稜哉が笑っていないことが気になって仕方がなかったのだ。

その後、稜哉は少し押し黙ってしまった。

「ごめん、なんか聞いちゃいけないかった？」

長い沈黙に耐えられず、絆はそう弁明した。

「いや、でもそんなに直球で聞かれたのは初めてだったからちょっとびっくりしただけだ。」

稜哉は少し息を吐いた後、

「養子なんだ。」

そうつぶやいた。

「養子……？」

「そう、つまり俺は里子に出されたってことだ。養父母と一緒に暮らしてないのも、どうしてもその負い目を気にしてしまうというか、まあそんな気遣いするほうが養父母に対して失礼だってわかってるんだけどな。それでも大学を卒業したらどうしても一人で暮らしたかった。それにどうしても本当の親ってものに会いたかった。一人暮らしも、自分の息子がしっかりと一人立ちして生きている姿を本当の親に見せたらきつと喜ぶだろうなって。それでもってさ、本当の親に会って一言でもいいから『大きくなったね』って微笑んでも

らいたかった。微笑んでもらった後は小さいころの話とかをして、養子に出されたとかそんなこと気にせず腹を割って親子で思いきり笑いあいたかった。って絆？」

絆はただただ涙を流していた。

「おい、絆どうしたんだ。」

「どうしたもこうしたもない。」

そして一呼吸おいてから、絆は稜哉に抱きついた。

「……絆？」

「さっき稜哉は俺が強いつて言った。でも、稜哉の方がずっと強いじゃんか。一人で悩んで、でもそれを打ち明けたらその人たちを傷つけてしまう。だからずっと自分の中にため込むなんて……。」

そうして稜哉の方を見ようとしたら、稜哉は絆のことを強く抱きしめて、

「今はちよつと見ないでくれ、見られたら格好悪い姿を見せることになる。」

「格好悪くなんかない。稜哉は一生懸命悩んで、一生懸命に行動した。だから格好悪くなんかないよ。」

「お前だけだ……。」

「……え？」

「俺の本当の姿を見つけてくれたのはお前だけだ。」

そう言った稜哉の顔はもう元通りの優しい笑顔だった。

第四話 旅行の計画

それから一か月。

休みの日には、頻繁に稜哉の元を訪れた。

単純に稜哉といるのが楽しいというだけでなく、あの時見せた悲しそうな表情、そしてそれを無理に押し殺して笑顔を作った、あの痛々しさを少しでも和らげることができるなら、とその感情が絆を稜哉の元へ運んでいた。

稜哉の所に行っても、大方はただただ何気ない話をし続けるだけだった。

たとえば、絆の学校の話や授業の難しさ、友達との何気ないひと時のことだったり、稜哉の仕事の大変さなど会話のネタは尽きることは無かった。

そんなある日のこと。

「絆、たまにはどっかに遊びに行くか？」

いつも通り稜哉の元を訪れて普通に会話している途中、稜哉は唐突にそう言った。

「いきなりどうしたの、稜哉？」

「いや、いつもいつもこうやって遊びに来てくれるのに、家の中だけで話し続けてるなんて、正直絆も暇なんじゃないかってな。」

「そんなことないよ。俺、稜哉と話すの楽しいし。」

「お、嬉しいこと言ってくれるな。」

そう言い、稜哉は絆の頭をクシャクシャとなでた。

実際絆自身、こうして稜哉の元を訪ねることがとても楽しみなのひとつになってきていた。

ただしゃべっているだけでも、ほかの人としゃべっているときとは違い、稜哉としゃべっているときは暖かな包容力を感じるというか、とても優しい気持ちになれる感じがした。

「それにさ、稜哉仕事忙しいんだし、せっかくの休みの日とかにわ

わざわざ外に行かなくてもさ。」

「なんだ、そんなこと気にしてたのか。」

正直なところ、絆は稜哉の重荷になることだけが一番危惧していることだった。

自分が理由で、稜哉の仕事に影響が出たり、日常生活上で不都合なことを起こしたくはなかった。

「よかった。絆と一緒に外も歩きたくないくらい嫌われてるのかと思った」

「な、そんなこと……」

「だってさ、オーナーに聞いたら絆って芸能人とか好きじゃないって聞いてたし」

「えっと、それは……」

そう、単純に芸能人が嫌いなわけじゃない。

ただ、ある理由で顔のいい人が少し苦手なだけだった。

「それはちよつとあるけど、でも稜哉は例外。」

「じゃあさ、今度一緒に遊びに行こうか。」

「あ、でもさ……」

それでも、歯切れ悪く絆は詰まってしまった。

「あー、分かった。だったらさ、俺も最近仕事続きで、自由に羽根休めできてなかったんだ。だからさ、絆が付き合ってくれよ。一人でどこかに行くのくらい寂しいことはないんだしさ。」

「あ、えっと、それならいいよ。」

「よし、じゃあ今週の土曜と日曜を使って目一杯遊ぶとするか。」

「え、泊りがけ？」

「ああ、そうだよ。せつかくだし、遊ぶなら楽しめるだけ楽しみたいしな。それとも、なんか用事なんかあるのか？」

「いや、用事とかはないんだけど……」

「ああ、オーナーが許してくれるかどうか？」

そう、昔から大方のことには寛容な態度を示すのだが、とかく他人の迷惑になりそうなことに関しては、かなり厳しい遥だった。

「……………うん。」

「それじゃあ、俺も一緒に説得しに行つてやるよ。それだったら大丈夫だろ?」

「あ、それだったら大丈夫かも。」

「おし、それじゃあ善は急げだ。さっそくオーナーの所に行くとするか。」

「あ、あのさ稜哉。」

「うん、どうかしたか?」

「あ、えーとさ、ありがとう。」

そう言つと、絆は少し恥ずかしそうに下を向いた。

「ああ。」

そう言つて、また絆の頭をクシャクシャと撫でた稜哉だった。

第五話 旅行の前の一時

週末の朝。

「ごめん稜哉。待った？」

「ううん、大丈夫だよ。それより、どうかしたのか？」

「いやあのさ、遥がくれぐれも、て何度も何度もずーっと繰り返すからさ。」

そこまで言つと、稜哉は少し笑った。

「本当、絆のそこは仲がいいな。」

「あ、えーと……………」

「気にするなつて。それに、今は絆と一緒にいてくれてるだろ。」

そう言いながら、稜哉はいつも通り絆の頭をクシャクシャと撫でた。

「それにしても、この前のオーナーと絆のやり取りは楽しかったな
ー。」

そう、それはあの旅行を計画した日のことだった。

「なんだつて、稜哉と絆と一緒に旅行だ？」

社長室で今までの経緯を聞いた遥は素っ頓狂な声をあげた。

「ええ、オーナー。絆はいつも遊びに来てくれるので、せっかく
なので今度の休暇にでも旅行にと……………」

そこまで稜哉が言つて、絆はギクツとした。

「いつも遊びに来てるだ？」

そこまで言つて遥は突然絆の方を見て、

「おい、俺はそんなこと一度も聞いてなかったぞ。」

と、大声で怒鳴った。

「あ、だから、それは……………」

「お前、昔から他人様にはあれだけ迷惑をかけるなつて教え込んで
きたのに。」

そこで、稜哉は突然、

「絆は迷惑なんかじゃないですよ。むしろ、生活に張り合いが出てくるくらいでとても楽しく過ごさせてもらっています。」
と言った。

「あ？まあ、稜哉がそういうんならいいけどよ。ただし……………」

そこで、また絆の方を振り返りながら

「旅行となると、それはダメだな。」

と言った。

「なんでですか？」

絆が聞くよりも早く稜哉はそう聞いていた。

「あ？だから前にも言っただろ。こいつは生活能力ゼロのやつなんだよ。そんな奴と一緒にどこか行ってみろ。絶対にお前、休暇を満喫できないぞ。」

「それでも……………。それでも俺は絆と一緒にいきたいんです。オーナー、お願いします。」

正直こんなに一生懸命にお願いしてくれるとは思っていなかった絆は、稜哉の熱心さに驚き、同時に自分も稜哉と一緒に本当に行きたいという気持ちになった。

「お願いします。」

二人の熱意を受けてしばらく遙は黙っていたが、突然こう言い放った。

「よし、だったらその旅行許してやる。ただし、もしもこのバカガキが厄介なことをしでかしたら、俺の所に連絡してこい。すぐに俺が連れ戻しに行く。そして……………」

そうして、絆の方を見て、

「その腐った性根を一から俺が叩き直してやる。覚悟しとけよ絆。」
と言った。

「オーナーって本当に子どもに対してもああだったんだな！。」

「稜哉、もうそれ以上言わないで、お願いだから。」

そう、すでにそのやり取りと同じようなことが朝も何度も繰り返された後なので憔悴しきっている絆だった。

しかし、絆はどうしても言いたいことがあった。

「あ、あのさ稜哉。」

「ん、どうかしたか？」

「俺さ、確かに生活能力ゼロだけど、稜哉に迷惑はかけたくない。だからさ、これからいろいろできるように努力する。」

「バカだな絆は、そんなこと気にしなくたっていいんだぞ。」

「嫌だ。俺が気にする。だって、俺、稜哉の重荷にだけはなりたくないもん。」

そこまで言った時、稜哉はとても愛おしそうな目で絆を見つめた。

「前にも言ったろ。俺にとつてさ、絆はいてくれるだけで俺に安らぎを与えてくれる。あのときだって、いつも自分を隠し続けていた俺にお前だけは気づいてくれた。だからさ、俺は絶対にお前を失いたくはない。絆、だから気にしなくたっていいんだよ。」

そこまで言われて、絆は真っ赤になって下を見つめた。

（な、なんだよ。前にもこんな感じがした。なんなんだよ一体……。）

そして、絆は少し深呼吸をしてから、

「うー、それでも、俺は稜哉の役に立ちたい……。」

そう言ったら、稜哉は一つため息をついた。

「まったく、絆は顔に似合わず頑固なんだな。」

「な、誰が頑固だ。」

「分かったよ。でもさ、少しずつでいい。無理せずがんばれ。どちらにしたって俺は絆を手放したりしないからさ。」

そういつて、また絆の頭を撫でた。

絆の心臓の鼓動はまたも速くなっていた。

第六話 草原での邂逅

「へー、稜哉が運転してるとこ初めて見た。」

助手席に座りながら絆は感心したように言った。

「ああ、職場が近いから基本的に寝かせてるような状態だからな。この車も絆に感謝してるだろうさ。」

先ほどまでの心の動揺から一転して絆は車の方に意識が向いていた。

「車に乗るなんて久し振りー。」

「ん、オーナーは運転しないのか？」

「うん。免許は持つてるんだろうけどペーパードライバーみたい。」

「へー、まあお付が運転するから大丈夫なのかな。」

「それよりさ、どこに行くかまだ聞いてないんだけど、どこに行くの？」

それを聞いた稜哉は顔に笑みを浮かべた。

「それは着いてからのお楽しみ。大丈夫、俺に任せとけ。絶対絆も気に入ると思うから。それより絆は少し寝といたほうがいいんじゃないか？」

「え、なんで……？」

「お前、どうせ昨日の夜は子供みたいに緊張して寝られなかったとかだろ。目の下にうつすらだけどクマがあるぞ。」

そう言いながら稜哉は絆の目の下をスーッと撫でた。

「な、嘘……。」

そうして、その行為に少しびくつとして真っ赤になる絆だった。

「大丈夫、着くまでかなり時間あるからゆっくり寝とけ。」

そいつって、信号で止まっている時間を利用していつも通り絆の頭を撫でた。

「もう、子ども扱いすんなよな……。」

そう言いながらも、すでに絆は半分眠りの世界に落ちて行っていた。

「おい絆、着いたぞ。そろそろ起きろ。」

「……ん、あれ？」

気づけばすでにそこは都会からはだいぶ離れた場所だとすぐにわかるような木々が生い茂るところだった。

「ほんと、絆つてぐっすり眠るタイプなんだな。車内なのに器用なのか、それとも単純に幼いだけなのか。」

「な、うるさいな。それよりここってどこ？」

「あー、そういうことは聞くんじゃなくって外出て自分で確認してみろよな。」

少し稜哉は呆れながら助手席のドアを開いた。

「え、あ、うわー。」

そう、絆が見たその場所は広大な草原が広がった絶景の場所だった。そして、少し落ち始めていた夕日がその彩にさらに鮮やかさを醸し出させていた。

「え、稜哉が見せたかったのってこれ？」

「ああ、気に入ってくれたか？」

「うん、気に入らないはずがないよ、こんなにきれいなんだもん。」
そう、一見すれば単なる草原ではある。

しかし、そこには夕日と相まってなぜだか幻想を感じさせる力があった。

「良かった、絆が気に入ってくれて。ここは俺の思い出の場所なんだ……。」

「思い出の場所……？」

稜哉はそれから少し遠くを見つめた。

「……稜哉？」

絆がそう呼びかけると、稜哉は絆の方を振り返った。

「絆、少しこのあたりを見て回ってみないか？」

その質問に対して、絆はただ首を縦に振った。

草原の中に続いた一本の道を絆と稜哉は二人一緒に歩いていった。しかし、二人は……。というより稜哉は何か感傷に浸っているのか全く言葉を発しなかった。

そこにはどうしても侵しがたい雰囲気があつて絆もまた無言で稜哉の隣を歩いた。

(…………どうしたんだろう稜哉？なんだかあの時みたい…………。)

まさしく、同じ雰囲気を出している稜哉を絆は心配した面持ちで見つめていた。

その視線に気づいたのか、稜哉もようやく絆の方を振り返って口を開いた。

「絆？どうしたんだ、そんなに心配そうな顔して。」

「…………なんでもない。それよりさ、稜哉…………。」

「うん？」

「さっきのさ、『思い出の場所』ってさ、それどういうこと？」

「ああ、あれか。」

そして、稜哉はもう一度遠くを見てから一息深呼吸をした。

「ここはさ、俺の運命の人にあった場所なんだ。」

そう言われて、絆はなぜだか心に大きな楔を打ち込まれたような痛みを感じた。

「…………え？」

「前にも言っただけど、俺は小さいころ養子に出された。それでもちやんとした生活をしていたし、新しく親になつてくれた父さんも母さんも俺に最大限に愛情を注いでくれていた。それでもさ、やつぱりどこかでちょっと寂しかった。そんなときさ、両親が、俺のことをこの場所に連れてきてくれた。」

そう言いながら、稜哉は草原の中に座った。

「絆、おいで。」

そう言いながら、稜哉は自分の膝の上を指さした。

「な、だから子供扱いすんなって…………。」

「ん、いいから。今日はさ……………」

その表情が何とも言えない優しさに満ちた表情だったので絆もいつの間にか稜哉の膝の上に座っていた。

「……………今日だけだからな。」

「うん、ありがとう絆。」

そう言いながら、稜哉は絆をギュツと抱きしめた。

「それでな俺は夜に両親が寝たのを見計らってここに来たんだ。」

そう言いながら、また稜哉は遠くを見つめ始めていた。

「そんな時はさ、俺も、もうそこそこ大きかったしさ。両親もうすす起きてたらしいけど、何も言わずに俺を送り出してくれたんだ。そしてさ、この場所に来た。」

稜哉が絆を抱きしめる力が少し強くなった。

「真夜中ってほどもなかったけど、そこは本当に幻想的な世界が広がっていた。俺もさ、気づいたらこの草原を走ってた。走って走ってそれでもやっぱり走ってさ。気づいたらかなり走ってたんだけどふと少し先を見たらさ、俺よりもっと小さな男の子が一人で草原の真ん中に座ってたんだ。」

「……………小さな男の子？」

「ああ、それでさ、幻想的な空間に一人の子が立っている、そんな状況からかいつもなら無視するはずの俺も気づいたらその子の隣に座ってたんだ。」

『どうしたの、こんなところで？』

『うーんとね、おつきさまがきれいだからそっと歩いてきたの。おにいちゃんはどうしたの？』

『おれ？おれはね……………』

『どうしたの？泣いてるの？』

『もうわかんない。あんなにいい家庭、優しい親がいてなんでいつまでも満足できないのか。』

『おにいちゃん、寂しいの?』

『…………寂しい?』

『あのね、ひとが泣くときはすごく寂しいときか、すごくうれしいときなんだって。』

『…………うん、そうかもしれない。』

『でもね、そういう時は誰かがいっしょにいてくれたらさびしいことは、はんぶんこできるしうれしいことはいっしょによるこべるんだって。』

『…………。』

『だから、ぼくがいっしょにいてあげる。そうしたらおにいちゃんもさみしくなくなるよね。』

『…………え?』

「俺はさ、あの子には本当に感謝してる。あの時、あの子に会えてなかったら俺は優しさとかそういうものに気づけてなかったかもしれない。他人から見たら些細なことだったかもしれない。それでも俺はあの子からかけがえのないものをもらった。絆、こんな話聞いてくれてありがとうな。」

「稜哉はさ、その子にはまた会えたの?」

そう聞くと、稜哉はにっこりと笑った。

「ああ、会えたよ。」

そしてそう笑顔で言われたとき、絆はどうしようもないくらいに心が張り裂けんばかりに痛んだ。

（なんなんだよ。なんでこんなに嬉しそうに話すんだよ。それよりなんだろう、この胸の痛みは…………。）

「絆、ありがとう。」

そういつて、稜哉は絆のことを再度抱きしめた。
しかし、絆の心は先ほどの痛みが消えないままだった。

第六話 草原での邂逅（後書き）

改めて、自分って自然大好きオタクなんだなーって思いました。
なんだか、ものすごく纏まらなくてただただ疑問点を増やしただけ
の話になってしまったかもしれません。

最後までにはこの辺のことに關してはすべてまとめていこうと思っ
ていますので、どうか最後までお付き合いください。

第七話 お互いの本当の気持ち

その後、日が暮れるまで草原でその景色を見た後、二人はその日泊まる民宿へ移動した。

「稜哉って案外庶民派なんだ……………」

「ん、まあ、あんまりにぎやかなところに行くと面倒なことになりかねないからな。」

「ああ、そういうことか。」

そう、そこはいかにも家族経営と言った風ななんとなく温かみのある民宿と言ったところだ。

しかし、先ほどから心が動揺している絆にとってはそんなことが本当に上の空の中での出来事となっていた。

（どうしちゃったんだろう俺……………。さっきとは違ってなんか、寂しい感じかな……………。）

その絆の動揺に気づいたのか稜哉は心配そうな表情をした。

「絆、どうか気分でも悪いのか？」

「う、うつん。なんでもない。」

「そっか、まあなんかあったらすぐに言えよ。せつかくの旅行なんだしさ。」

そういうと稜哉は女将の案内について行った。

それに遅れずと絆も稜哉の後ろについて行った。

（そうだよ、せつかくの旅行なんだ。こんな変な気持ちで台無しにしたいくない。第一、稜哉のあんなに嬉しそうな顔見てなんでこんな沈んでんだろ。切り替え切り替えっと。）

しかし人間は無理をするとどこかに歪が生じるものである。

絆もその例に漏れず、なんとなく空元気な状態となってしまうていた。

「へー、結構部屋から見た景色もきれいなんだねー。」

部屋に着いて二人は一息ついた後窓の方へ足を運んでいた。

「ああ、こちら辺は基本光が少ないからな。あっちの方に見える都会の光は結構きれいに見えるだろう。」

補足すると、この民宿は少し小高い丘の上に立っているような場所なので、短く言うと眼下に夜景を一望できるのだ。

「でもさ、稜哉はいつもこんな景色見慣れてるんじゃないの？」

「ん、そんなこともないさ。それにさ、今日みたいに夜は絆も一緒には見れないしな。」

「……………え？」

「あー、いや。なんでもない、なんでもない。そんなことより、ここには大浴場があるんだ。せつかくだから飯の前に浴びに行くか？」

「あー、そうだね。結構汗かいたかも。」

「よし、じゃあ行くか。」

「うわー、結構広いんだ。」

大浴場に着いた絆は一人叫んでいた。

「ああ、それにこの時期は人の入りも少ないみたいだし、貸切みたいなもんだな。」

入ってきた稜哉を見て思わず絆は稜哉に見とれてしまった。

（な、ていうか、結構稜哉ってがっしりとしてるんだ。）

「どうした、そんなに見惚れたか？」

「な、そんなこと。」

絆は図星を指され思わず赤くなっていた。

「絆は……………。あんまし筋肉ついてねーな。しっかり運動してるのか？」

稜哉は絆の身体をぺたぺたさわりながら確認した。

「な、ちょっと、稜哉、くすぐりたいよ……………」

身を振りながら稜哉から離れようとした瞬間、稜哉は突然絆のこと

を抱きしめた。

「な、稜哉？あの、ちょっと……………」

正直、他人と密着することもあまりない上に、現状がお互い裸なだけあって、かなり絆は動揺した。

それでも、本気で抵抗して離れようとする気にもなれない自分に、絆はさらに驚いた。

（なんでだろ、普通こういう状態って嫌悪感とかでいっぱいになるんじゃないのかな……………」

嫌悪感どころか、少しだが心地よい感じまでしてしまっている自分に絆はもはや何が何だか分からなくなっていた。

「絆……………」

その声が妙に熱っぽくて絆は少しゾクつとした。

「な、何、稜哉？」

その時、ふと自分の体に固いものが触れていることに絆は気づいた。

「あ、あの稜哉。そのさ……………」

その瞬間、稜哉は絆をバツと離れた。

「ご、ごめん、絆。怖かったよな。悪い、俺少し脱衣所に忘れ物した。」

そう言っ、稜哉は浴場から出て行ってしまった。

しかし、絆は先ほどの稜哉の状態を考えてから真っ赤になった。

「あ、危なかった。危つく性欲に支配されるところだった……………」

俺はあいつと一緒にいられるだけでいいはずだろ。それなのに何考えてんだよ、俺は……………」

脱衣所では一人稜哉がつぶやいていた。

その後、稜哉はなんとか旅行中、絆の貞操を守り抜くことはできたのだった。

第七話 お互いの本当の気持ち（後書き）

もしかしたら、この話では後半で一話短編小説を取って18歳未満禁止の濡れ場を書くことになるかもしれない。

その時は18歳未満の方々には本当に申し訳ありません。

第八話 一人考える

旅行から帰って早一週間が過ぎた。

「うー、なんなんだよ、もー。」

あの日から絆は悶々とうなされ続ける日々が続いていた。

結局、あの風呂での出来事のせいで、そのあとの旅行はろくに覚えていない状態の絆だった。

「あの時は、あんなになってたくせに、なんでその後平然と過ごせるんだよ。」

そう、あ後は稜哉は風呂での出来事などなかったかのように平然とふるまったのだった。

結局、そんな稜哉とは違って、思いつきり意識してしまう絆はこの一週間、稜哉に会いに行くことすらできないでいる。

（…………でも、確かに稜哉はあの時…………。じゃあ、もしかして、稜哉は…………。）

そこまで考えた絆はすぐに頭を振ってその考えを打ち消した。

（そんなことあるわけないだろ。第一、稜哉も俺も男なんだぞ。それに、稜哉が本当に大事にしたい人は…………。）

そして、絆はあの稜哉の話したことを鮮明に思い出してしまった。その時、あの話を聞いた時のような、鋭い痛みが絆の心を抉った。

（な、なんなんだよ。なんであのことを思い出しただけで…………。）
一度悪い方に考え出すと、どんどん悪い考えが頭に出てきてしまう。

（そうだよ、俺は稜哉にとって、二番目に理解した人間なんだ。そう、二番目なんだ…………。）

そう考えていたら、いつの間にか涙が止めどなく流れてきた。

「…………ひつく。なんで…………、こんなに…………。」

一人で泣いている時間は途方もなく長く感じられた。

「…………うっ、稜哉…………。会いたいよ。」

いつもみたいに優しく頭を撫でてもらいたい。

そう思っても絆の足はどうしても稜哉の家の方には向かなかった。もし、この気持ちに正直になって稜哉の所に向かったところでどうにかなるものではない。

むしろ、この気持ちを素直に受け入れてしまえば、いつか来るであろう稜哉との別れに自分は耐えられるのだろうか。

その時、遥のように泣いた後に心機一転して新たなことに打ち込んでいくことが果たしてできるのだろうか。

そうなるかどうかは今の決断がすべてを決める。

「そうだよ、今ならまだ引き返せる。だから……。」
絆は涙をぬぐった。

「稜哉の所に行くのはもうやめよう。」

意を決して、絆は自分に言い聞かせるように言った。

そう、稜哉の所に行くようになったのも、あの苦しそうな笑顔を本当の笑顔にすることができるとかもしれないと思っただけだった。

でも、それができるのは自分ではないのかもしれない。

それなら、もう絆があの場合に向かう必要もなくなる。

そこまで考えが及んだ時、突然電話の着信音が家の中に響き渡った。

「はい、赤城ですが。」

『ああ、絆。俺だよ。』

「あ、遥。どうかしたの？」

『ん、そんなことより、お前こそどうしたんだ？ なんだか声がいつもより枯れてるみたいだ。』

そこまで言われて、改めて遥の母親としての力を再認識した絆だった。

「あ、いやなんでもないよ。」

『ふーん、まあ、お前がそう言うならいいんだけどな。』

ありがたいことに、あまり詮索はしないでくれた。

正直隠し通す自信が今の絆には無かったのでホッとしていた。

「それより、どうしたんだよ。いつもだったらこれくらいの時間から忙しくなるはずだろ。」

今はちょうど4:00を超えたくらいの時間だった。

曜日も土曜日だし、ちょうどいろいろと動き出す時間のはずなのだ。

『ああ、そうだった。それがよ、稜哉のヤツがまだ仕事場に来ないんだよ。いつもだったら遅刻なんてまずしないはずなのによ。』

「……………え、稜哉が？」

『ああ、それでさ、お前よく稜哉んとこに行ってたんだろ。だからさ、少し様子を見て来てくんないか？』

「え、えつと、それは……………」

『ん、なんかいけない理由でもあんのか？』

「いや、そんなのはないけど。」

『そつか、じゃあ任せたな。』

言うが早いか、すぐに遥は電話を切ってしまったていた。

「あ、ちよつと、まだいいって言ってない……………」

今しがた決めたばかりのことが崩されるなんて、正直絆もほとほと参った。

しかし、少し考えてから、先ほどの考えに修正を入れることにした。
「そうだよ、今までの楽しかった時間。それは誰でもない、稜哉がくれた物なんだ。だったら、このまま終わりになんてできない。だから、自分でお別れを言いに行こう。」

そうして、絆は外出の準備を始めた。

絆の目にはまださっき泣いた後がくつきり残っていたが、決然とした表情には迷いの色は無かった。

第九話 囚われの子猫

絆は一人、稜哉の家を目指して歩いていった。
気持ちにはもう決まっている。

しかし、どうしても晴れきらない心持でいっぱい絆はどうしても心ここに非ずと言った状態が続いていた。

そんなとき、前方不注意のために、絆は誰かにぶつかってしまった。
「あ、ごめんなさい。」

そう言いながら絆はぶつかってしまった相手に謝罪をした。

「ああ、君、この前の。」
「は？」

そこには、絆の見覚えのない顔の人物がともうれしそうに絆を見つめていた。

「ええ、忘れちゃったの？この前、赤城芸能のロビーで会った。」
「ああ、あの時の。」

そこまで思い出して絆は「……げ。」となった。
「思い出してくれたか」。あの時は思わぬ邪魔が入っちゃったけど、これも運命の巡り合わせかもね。ここら辺にいい店があるんだ。これから一緒に行こうよ。」

「あー、その、そう。これから用事があるんだ。だからまた今度……。」

そう言っただけで絆は立ち去ろうとしたが、その時突如どこからか数人の男が絆のことを取り囲み、絆の腕を拘束した。

「………つ。何のつもりだよ。」
「いやいや、せっかく手に入れた獲物を簡単に逃がすわけにはいかないからね。」

「………は？獲物？」
「そう。」

そう言って相手の男は下卑た笑みを浮かべた。

その間に周りの男たちはズルズルと絆のことを引つ張り始める。

「ちよつと、どこに連れてく気なんだよ。」

往来の人間はそこそこにいるのだが、残念ながら誰も助けしてくれるような様子はない。

「もちろん、獲物を手に入れたら自分のテリトリーに連れて行くのが普通だよな。」

そう言いながら、周りの部下達（のように見える）やつらに指令を出し始めた。

（や、やばい。稜哉のことの前に、自分をなんとかなくっちゃ。）
そうは思っても、如何せん周りの男たちはどこかのボディガードでもやっているのか、かなり鍛えられているようだった。

はつきり言って、運動には自信のある絆にとっても分が悪い勝負だった。

そうこうしているうちに男の一人が絆に当身を食らわした。

「……………うう。」

そのまま絆は意識を手放してしまった。

「……………っ痛。あれ、ここは？」

周りを見渡してみると、どうやらそこは廃工場のような場所のようだった。

（そっか、俺あいつらに一発打ち込まれて……………。）

そして、絆は体を揺り動かしその場から逃げようとしたが、ジャリッと言う音を聞いてそちらの方を見ると、なんと手錠がかかっていた。

（な、なんだよこれ。なんでこんなもんが？）

しかもよく見てみると、その手錠の片側は近くの鉄の棒につけられていて、逃げ出すことができないようにされている。

（ったく、なんなんだよ。俺は、稜哉の所に行かなきゃならないの

に……………」

そこまで考えが及んだ時、絆は、はっとして片方のポケットに入れた携帯を取り出して時間を確認した。

（やっぱ、もうこんな時間かよ。）

時計はすでに6：30を指そうとしていた。

（何とかして、早く稜哉を呼びにいかないと。）

稜哉にお別れを言うどころか、遥にこの世からお別れさせられてしまふ。

何とか外せないか絆は手錠をガチャガチャいじり始めたとき、

「ようやくお目覚めかい？」

そう言つて、元凶の男が現れた。

「お目覚めも何もあるか。さっさとこれ外せよ。」

「ああ、ちゃんとやるべきことが終わったら外してあげるよ。」

「あ？やるべきこと？」

「そう。」

そう言いながら、その男は絆の目の前でしゃがみながら、絆の顎を持ち上げるように手を添えた。

「君つてさ、稜哉のお気に入りなんだろう？」

「は？何言つて……………」

「前はさ、あいつは基本的に他人に対して無感情だったんだ。それこそ、自分ひとりが遥か高みにいるような感じでね。でもさ、君が来てから、あいつは変わった。まるで水を得た魚みたいに生き生きと振る舞うようになった。」

そこまで言つて、男は握り拳を地面に打ち付けた。

「憎いんだよ、あいつが。あいつは何事も無かったかのように飄々となんでもこなす。拳句の果てにはそう言った感情の籠った演技までも楽々とこなす。あいつのせいで、俺はいつでもどこでも二番手だ。せつかくの仕事もあいつの影としか見られない。」

「な、そんなの、お前の勝手なエゴだろ。それにな、お前は知らないかもしれないけど、稜哉だっていっつも一生懸命になんでも努力

してるんだぞ。」

そう、絆は稜哉の家に遊びに行ったとき、一度だけ稜哉が俳優として行っている劇のセリフを練習しているのを聞いたことがある。でも、それ以降は、絆の前では絶対にしなくなったのだ。

「稜哉は人の見てないところで一生懸命努力してる。お前みたいに陰湿に恨んでるだけじゃないんだ。」

「うるさい。」

さっきまでの冷静さが嘘のように男は切れていた。

「あいつの努力なんか知ったことか。俺をイラつかせてんのはそれだけじゃねえ。あいつにはいつもオーナーが味方する。なんで俺の方が適任な時もあいつに仕事を回す。」

そこまで言ってまた男は冷静さを取り戻し始めた。

「だから、あいつに復讐してやるんだ。そのために、君には生贄になつてもらうよ。」

「は？だから、それが意味わかんないっての。」

「まだ分らないのかな？君は稜哉の弱点なんだよ。」

「俺が……稜哉の弱点？」

「そう、これだけ可愛がつてる玩具が俺なんかにいよいよにされたらあいつはどんな顔して堕ちてくれんのかな。」

「俺が……稜哉の玩具？」

そこで絆はクスクスと笑ってしまった。

「なんだよ、何がおかしいんだよ。」

「バカだな、あんた。俺なんか稜哉の弱点にはならないよ。だって稜哉は……。」

そこから先を言おうとしたとき男は突然自分の携帯を取り出してあの音声を流し始めた。

『俺にとって絆は一番、何をおいても守りたいやつなんです。』

そう、稜哉の声で録音されていた。

「これは……？」

「ちゃんと聞いたか？これは、以前に社長室での会話を盗聴したも

のだ。ここで言っている絆って君のことだろう？」

「……………これ、本当に稜哉が？」

男は首を縦に振った。

絆は今の状況なんかをすべて忘れてしまいうくらい激しい感情に襲われた。

（……………稜哉、稜哉、稜哉！）

そうして、絆は手錠がついた手を外そうとして激しくもがいた。

「やっと分かったか。だからね、これからその稜哉を落とすために君には最高の生贄になってもらうよ。」

そう言つて、男は絆の服を脱がせにかかった。

「や、やめろよ。」

「おとなしくしてないと、全部破つて脱がせちゃうよ。」

そう言つて、男は絆の上着のボタンをすべて外し終えた。

（やだ、稜哉。助けて……………。）

その時、廃工場の入り口の方で大きな物音がした後、こちらに向かって走ってくる音が聞こえてきた。

「絆、どこなんだ。」

その声は、絆が求めてやまなかった稜哉の声だった。

「稜哉。俺はここだよ。」

そうして、稜哉はこの部屋のドアを蹴破って入ってきた。

「絆！」

「おっと、ストップ。」

そこで男は絆のことを半分抱きかかえながら稜哉のことを手で牽制した。

「この状況、どういうことかわかるよね。」

「柊也！貴様どういふつもりか知らんが、絆に指一本出してしろ、お前の命はないものと思えよ。」

いつもとは違う鬼気迫った表情の稜哉がそこにいた。

「うるさいな、俺はこれから絆と楽しくやるんだよ。邪魔しないでくれるかな？」

そう言いながら、男は絆の首筋を舐めた。

「……………んん。」

その瞬間、稜哉が切れたように男に向かって全力でダッシュした。

そして、男は袖口から咄嗟に何かを取り出そうとしたが、間に合わず稜哉の渾身の一撃を食らっていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1445p/>

恋の季節は突然に

2011年5月22日11時54分発行